

ラウンドテーブル・2014

2015. 1. 16

生・労働・運動ネット

富山市神通町3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

ニュースレター

「ラウンドテーブル・2014」第8回:「『敗戦／戦後70年』は私・たちの〈問い〉か——その1 私・たちの〈問い〉としての『敗戦／戦後』」(2014/12/21)での論議から

はじめに

「生・労働・運動ネット」では、参加者がこの世界に生きる中で自分がこだわり続けてきたことを持ち寄り、安倍政権に象徴される「第2ラウンド」のネオリベと戦争国家との「野合」に対していかに拒否を突きつけるかを探るための自由な討論の場として、「ラウンドテーブル・2014——『生』の〈註〉を行き交わす」を、昨年4月から月に1度のペースで営んでいます(「ラウンドテーブル・2014」の第4回(2014/8/24)での論議については、「拒否」の〈前〉線情報 No.4)所収の「沖縄「振興・開発」体制と沖縄自治の波動」を、第5回(2014/9/21)での論議については、「生・労働・運動ネットZINE・2 〈フクシマへ〉折り返すことに向けて」所収の「〈フクシマへ〉折り返すこと」を参照)。

今年2015年は、「敗戦／戦後」からちょうど70年目に当たります。「ラウンドテーブル・2014」の後半のプログラムの「『敗戦／戦後』は私・たちの〈問い〉か」では、この国の政治・社会システムの成立・「構成」を根底から捉えなおすことを通じて、日本の「構成」的解体への道筋を手探るすることを試みます。

昨年12月21日、「ラウンドテーブル・2014」の第8回「『敗戦／戦後』は私・たちの〈問い〉か——その1 私・たちの〈問い〉としての『敗戦／戦後』」の集いを行いました。「その1」の集いでは、最初、現在の状況の政治的・歴史的「文脈」に迫りたいという「『敗戦／戦後』は私・たちの〈問い〉か」のプログラム全体のモチーフに関わる文章として、「昨年末の安倍政権による解散・総選挙は、政権への人々の怒りを回避し、議論を封じ込めるための手段であり、『究極の文脈の破壊』だ」と語る酒井隆史(大阪府立大・社会思想史)さんの2014年12月4日付「北陸中日新聞」のインタビュー記事を紹介しました。併せて、「『敗戦／戦後』は私・たちの〈問い〉か」のイントロダクションとして、「死んだ男の残したものは」(谷川俊太郎作詞・武満徹作曲)の歌を聞きました。また、2010年と2014年の新聞各紙の「8・15」の社説を読んでそれがどこの新聞社のものかを考えることを行った後、「『敗戦／戦後70年』はあなたの〈問い〉か」と題して、いくつかの〈問い〉を軸に参加者同士での「フリーディスカッション」を行いました。

以下、「その1」の集いの論議のアウトラインを紹介します。

当日の論議から

□「死んだ男の残したものは」の歌をめぐって

A：「死んだ男の残したものは」という歌は、ベトナム戦争が激化し始める1965年に作られているが、その頃、この歌がどのように受け止められたか知っている人がいれば、教えて欲しいのだが。

B：自分の記憶では、当時のベトナム反戦集会でこの歌が歌われたのを聞いた記憶はないが、そうした集会で歌われるような反戦歌とは異なり、静かに一人で聞くようなものだったと思う。作曲者の武満徹は、歌謡曲のように誰もが気軽に歌える歌にしたいと言っていたそうだが、やはり、非常に重たい感じの歌だ。

C：この歌の4連目までとそれ以降では大きくトーンが異なり、5連目以降、「問い」が直接こちらに向かってくるように思う。1～4連目までは、「何も残さなかった」だが、5連目では「何も残せなかった」となっていることの微妙なニュアンスを考えなければならないように思う。

D：この歌の6連目が引っかけると同時にこだわりを感じる部分なのだが、今のこの非道い世の中を生きていると、簡単には「輝く今日とまた来る明日」と言えない気分になる。そうした状況の中で私たちはどこに自分たちの希望のありかをさぐるかが改めて問われているように思いながら、この歌を聞いていた。

E：私はこの歌に対して拒否感があるのだが、戦時中の日本帝国軍のアジアの人たちへの残虐な仕打ちに対して、このような叙情的・情緒的な表現はあまりにも不釣り合いではないか。

G：言われていることは分かっているつもりだが、そうした日本帝国時代のアジア民衆への加害行為や戦争責任を認識するというのも、「敗戦／戦後」にすぐに問われたというよりも、ベトナム戦争に反対する取り組みの中でもう一度改めて問い直されたということがあるように思う。

ベ平連の中心的なメンバーだった小田実は、「加害者＝被害者」論を唱えて、戦争の被害者だった当時の民衆が同時にアジアの民衆にとって加害者だったと主張したが、それは、それまでのもっぱら被害者感覚に基づく戦争認識を大きく変えるものだった。そのように、日本の民衆のアジアに対する加害者性が問われるのは、この歌が作られた時期よりも、もう少し後のことになる。

H：歌にするということ自体が叙情性を帯びざるを得ないということもあるのだが、反戦歌というのは、戦争に反対する歌詞の一方で、結構、勇ましい軍歌調のもの多くて、その意味では、この歌は異色のものだと思う。今、言われたことは、歌の問題というよりも、むしろ、「敗戦／戦後」から70年を経てなぜ今、そのことが改めて問われるのかという今日の論議の中で考えるべきことのように思う。

□ 『敗戦／戦後70年』はあなたの〈問い〉か?』での論議から

(1) 「国政選挙の実施の経緯・結果や、そこに現れている現在の政治・社会状況についてどのように感じるか?」という〈問い〉をめぐって

A: 先日の衆議院選挙についておかしいと感じることは主に2つあるが、1つは、自民党公認候補の誰もが同じように没个性的に「この道しかない」というフレーズを選挙ポスターに入れていて、自分はどういう意見かということ全く言わない。結局、小選挙区制になって、自民党の公認をもらうことが即「当選」ということになったということがあって、ミニチュアの安倍しかない選挙になっている。

もう1つけげんに思うのは、現在、まるでその選挙自体がなかったかのように、マスコミでは選挙のことが「スルー」されていて、それに対する批判的な言説自体が全くと言っていいほどないことだ。

B: それはその通りだが、「敗戦／戦後」から70年を経てなぜ今、そのことが改めて問われるのか」ということに照らして、この間の選挙について論じるのでなければ、一般的に「政治解説」をしているだけのことになってしまう。そのように、今、「敗戦／戦後70年」ということを本当に私・たちの〈問い〉にできるかが問われているように思う。

「この道しかない」ということを自民党の候補者・議員たちが異口同音に言っているわけだが、ある人に言わせれば、それは英語で言う"**T I N A**"="There Is No **Alternative**."、つまり、イギリスのサッチャーが言ったとされる「他にオルタナティブは無い」と同じだということになる。「これしかない」というのは、安倍が主観的にどう感じているかは別として、現在の路線の他に自分が生き残る道はないところまで追い詰められているということではないか。

C: 安倍が「この道しかない」と言ったことに対して、きちんと拒否を突きつけたのは誰かと言えば、それは間違いなく、沖縄の人々だろう。自分としては、そこにかろうじて希望を見いだしている。

「永続敗戦論」の著者の白井聡が沖縄知事選について書いた文章の中で、ゲバラにちなんで、「第2、第3の沖縄を!」と言っているが、ヤマトの私・たちの側が沖縄での闘いにいかに連動・連結しうるかが問われているように思う。

(2) 「あなたは、先の戦争を何と呼ぶか?」という〈問い〉をめぐって

A: この前の戦争については、やはり、「アジア・太平洋戦争」ということになるように思う。第2次世界大戦と言ってもいいが、日本の戦争責任ということも含めて言えば、それが妥当な言い方なのではないか。

B: 私の親の世代は、実際に戦争に行ったり、戦時中苦勞したりして、戦争の記憶が生々しく残っている。そうした話を身内から何度も聞かされたが、「アジア・太平洋戦争」といった言い方はどうしてもよそよそしく聞こえるところがあって、自分としては「先の戦争」としか言えない。

C: 「アジア・太平洋戦争」という言い方でいいように思うが、自分はある時期まで、ア

ジアに対する日本帝国の侵略戦争について「15年戦争」という言い方をしてきた。そう最初に言ったのは批評家の鶴見俊輔だが、そのように、日本帝国による侵略戦争の起源をどこに置くかという論議と戦争をどう名付けるかということが分かち難くある。

D：自分としては、あくまでも「対アジア・太平洋侵略戦争」だと言いたい思いがある。

E：そう言いたい気持ちは分からないわけではないが、「大東亜共栄圏」構想を唱えて、欧米の植民地だったフィリピンやインドネシアに侵略して、傀儡政権を樹立して「植民地解放」の体裁を取るといったように、右翼的な立場の人たちが「アジア解放」のための戦争だと言い張る余地が全くないわけではない。

F：韓国の一部の研究者は、戦時中の「総力戦体制」が植民地だった朝鮮の近代化に「貢献」したと言っている。そのように、「総力戦体制」は、生産体制と物流の集約化や計画化を伴うもので、そうしたある種の近代的な合理主義は、天皇制国家の原理とも齟齬をきたす部分をもっていた。安倍の祖父の岸信介も、戦時中は、満州の生産体制の近代化を推進する「革新官僚」として辣腕を振るっていた。日本がアジアの人たちのことを考えてそうしたのではないことは言うまでもないが、そのように、日本に植民地化された側の近代化に「貢献」したとして、戦前の日本帝国を擁護する立場の人たちの主張をむげに否定できない面もあるということが、この問題の難しいところだ。

E：先程、「対アジア・太平洋侵略戦争」だと言っていた人に聞きたいのだが、あの戦争を侵略戦争だと言うことだけでいいのだろうか。確かに、中国やアジア諸国に対しては、日本は侵略戦争を行っていたが、太平洋戦争と呼ばれる戦争の全てが侵略戦争ということではなく、例えば、「真珠湾攻撃」は、フィリピンや太平洋諸島を植民地とするアメリカと日本帝国とが闘うという植民地主義国家間の闘いだった。そのように、侵略戦争であるとともに、日本と欧米といった植民地主義国家間の戦争でもあるという二面性を同時に言い表すような言い方は、いまだに存在していない。

「死んだ男の残したものは」の歌の中の言葉に引っかけて言えば、それこそ、私たちは、あの戦争の名前一つ残すことができていないのではないか。

G：「先の戦争を何と呼ぶか」という問い自体がある世代までを想定したものだと思うし、それは、実際に戦争を体験したような世代が身近にいない若い人たちにとっては本当は成立しないものだろう。かつては「受験戦争」という言い方をした時期もあったが、先程の問いを発する際に、現在、この日本を生きる自分は何を「戦争」だと捉えるかという問いが同時にあるように思う。

(3) 「来年2015年を『終戦70年』・『戦後70年』・『敗戦70年』のどの言葉で呼ぶことが最も相応しいと思うか？」という〈問い〉をめぐって

① 「終戦70年」／「戦後70年」／「敗戦70年」！？

A：「戦後70年」をもっぱら「終戦70年」にすり替えて、そのもつ意味を矮小化しようとする動きが強くなる中で、「敗戦／戦後」という時間が何だったのかをきちんと考えるために、あくまでもそれを「敗戦70年」と呼びたい。

B：自分としては、白井聡の「永続敗戦論」にならって、「永続敗戦レジーム70年」と言うのが相応しいと考えている。

C：「終戦70年」、「敗戦70年」、「戦後70年」のどれで呼んでも自分としてはしっかりこない。そのような意味では、2015年という年を自分たちからの「反撃の始まりの年」にしたいという思いが強くなる。

D：今、言われたことは、もっと言えば、2015年を日本列島社会の「解放元年」にしたいということだろう。その思いは分かるが、しかし、その一方で、「敗戦／戦後」の70年という時間は何だったのかという〈問い〉は依然として残り続けることには変わらない。

少し興味があって、堀田善衛や加藤周一といったいわゆる「戦中派」と呼ばれる世代の人たちが戦時中のことを題材にした小説を読んでいるが、そうした人たちにしても、やはり、「終戦」であって、「戦争がようやく終わったんだ」という安堵の気持ちの方が強い。もちろん、それは、ある時間が経った後で当時のことを振り返っているもので、当時の気持ちをそのまま、表現しているわけではないにしても、当時、あの戦争が終結したという事態を「終戦」ではなく、「敗戦」だと認識した人たちがどこまで本当にいたのか疑問に思う。

E：この場の参加者の誰もが知っているようなことだと思うが、「玉音放送」が流されたのは1945年8月15日だが、「ポツダム宣言」の受け入れはその前日の8月14日だし、正式に日本帝国がミズリー号上で日本が連合国側に降伏したのは同年9月2日だ。そうした意味では、「敗戦／戦後」がいつから始まったかということ自体がそれほど自明なことではない。

D：ところで、「敗戦70年」と言うのなら、それは日本が何に負けたことになるのか。そのこと自体を考えなければならないように思う。

F：教科書的に言えば、やはり、「連合国」に負けたということでは。

G：それはそうだが、一般的には、連合国ではなくアメリカに負けたと思われがちだし、中国に負けたと思っている人はほとんどいない。

D：もう何十年も前の話だが、自分が若い頃に、「日本はアジアの民衆に負けた」とある人から言われたことがあって、それまでは日本はアメリカに負けたと思っていたので、そのことは非常に鮮明に覚えている。そのように、「日本帝国はアジアの民衆に敗北した」ということが、この列島社会に生きている者たちの認識に決定的に欠落しているように思う。

日本帝国が中国全土を支配することができなかったのは、中国の民衆の抵抗運動があったからだと言ってもいいと思うが、結局、何に敗北したかを認識できないことが、あの戦争を名付ける共通の呼び名もないし、「敗戦／戦後」の70年をどう捉えるかということに対する共通の見方が成立していないという状況をもたらしているように思う。

H：日本がアメリカの科学や生産力に敗れた、という言い方もあるが、「日本が何に負けたのか」ということと対になって、「日本の何が負けたのか」ということがあるのではないか。そのことを日本の軍事力や経済力がアメリカに負けたと言ってしまうと、それも違う

ように思うが。

I：敗戦当時の日本の知識人は、単に軍事・経済だけではなく、精神文化も含めた日本の全てが敗北したと言っていたように思う。

J：講談社文庫の創設の辞に「これからの日本は文化国家として再生する」といった文句があるが、当時、日本が「文化国家」として復興するという言い方が盛んにされていたように思う。

E：1951年に結ばれた「サンフランシスコ講和条約」には、「この条約の締結後、日本との戦争状態を終結する」と書かれていることを最近知ったが、その意味では、いつから「終戦」なのかということ自体が、そんなに自明なことではないのではないか。

D:それは、つまり、「サンフランシスコ講和条約」の締結までは、「敗戦」ではあるが「終戦」ではないということだろう。当時でも、それが「片面講和」だという批判がされていたが、ソ連や中国のように、そこから排除されていた国々との間で戦争終結が宣言されるのはずっと後のことになるし、北朝鮮との間では未だに「終戦」が成立していない。

沖縄の作家の目取真俊が「沖縄『戦後』ゼロ年」という本を出しているが、日本「復帰」後の今も米軍による実質的な占領状態が続く沖縄では、「終戦」はあっても「戦後」はない。そうした意味では、沖縄の人たちに向かって、こうした〈問い〉を無邪気に聞くわけにはいかないだろう。

②安倍との「無理心中」をいかに拒否するか

A：この前の国政選挙の実施が決定された経緯や、選挙後、現政権の掲げる政策が支持されたと得意げになっている安倍の姿がとても気持ち悪いというか、強い反感しか感じない。結局、消費税10%への引き上げを延期して選挙を行うことで、安倍は「アベノミックス」への批判を封印しようとしたと思うが、その上で、安倍は、憲法「改正」を含めてやりたい放題の政策を更に強引に推し進めることになるだろう。

そうした意味で、自分たちの課題は明確になってきているし、2015年を安倍の攻撃をはねのける反撃の年にしていきたいと思う。

B：この間、気持ち悪い状況になっているというのはその通りだが、それをそのように言うのではなくて、いかに運動の言葉として表現するかが問われているのではないか。

先程の話にもあったように、安倍が「この道しかない」というのは、もう後がないというところまで安倍が追い詰められているということでもあって、私たちが安倍やそのとりまきの連中と否応なく「無理心中」させられるのかどうかという状況になっている。

現在、「永続敗戦レジーム」に亀裂を入れつつあるのは沖縄だけだが、そうした意味では、私たちが「オキナワ」になるしかないというか、自分たちの足下にいかに「オキナワ」を創り出すかという〈問い〉が問われているのではないか。

先程から、先の戦争を何と名付けるか、また、「敗戦／戦後70年」という時間をどのように捉えるかということの共通の見解が成立していないという話をしてきた。しかし、そのことは単に認識上のレベルに止まるのではなく、「敗戦／戦後」の70年の時間の中でこの列島社会を生きてきた私たちが何をしてきたのかという自覚や反省の上に立って、「永続敗戦レジーム」をいかに解体するかという〈問い〉と重ね合わせて考えるべきことだろ

う。

安倍の攻撃に対して拒否を突きつけない限り、私たちは彼との「無理心中」を強いられるしかないが、そのことを実際の運動として表現することの内実をどう生み出すかを、ぜひ、このような場で考えていきたいと思う。

C：先日、チェコスロバキアのマルタ・クビショバという歌手についてのNHKのドキュメンタリー番組を見たが、彼女の生き方に強く心が惹かれた。彼女はソ連の軍事占領によって「プラハの春」が弾圧されたことに抗議して、ビートルズの「ヘイ、ジュード」の歌にチェコ語で新たな歌詞を付けて歌ったことで政治的に迫害を受けたが、それに屈することなく、民主化運動のリーダーを引き受けた人だ。彼女は、また、チェコの平和を求める「マルタの祈り」という歌を歌っているが、チェコのように周囲の大国によって運命を左右された経験をもつ国の人々にとって、自由や平和とは自らの手で勝ち取るものであることを強く感じた。それに対して、日本の平和というのは、鶴（ぬえ）のような非常に曖昧模糊（あいまいもこ）としたもののように思う。

B：結局、日本で戦後、「平和」と呼ばれていたものは、アメリカとソ連が核兵器を突きつけ合うという相互抑止を通じて、「戦争不能」状態を生み出したということではない。

先程、何を戦争と呼ぶかという話もあったが、「冷戦」崩壊後は、主権国家間の正規軍同士の戦争というよりは、アフガニスタンやイラクでの戦争に現れているように、いわば、グローバル化した世界システムの中での「内戦」状態に対して、戦争というものが、現在の支配秩序を脅かす存在を取り締まり、鎮圧するようなある種の「警察行為」のようになってきている。そのように、日本の平和というものは、冷戦前は「戦争不能」状態に過ぎなかったし、冷戦後は、「世界内戦」の中で世界の支配秩序の「憲兵」として振る舞うアメリカに対して、現行憲法の遵守という見せかけの下で日本が協力することでしかないという意味では、非常に空疎なものだ。

「社会主義圏」内での〈68年〉として「プラハの春」があったが、そうした日本の平和の空疎さを私・たちに気付かせてくれたのが、日本も含めた全世界的な既成の支配秩序への「反乱」としての〈68年〉であったし、それが自分にとっては、「敗戦／戦後」の中で最大の出来事だ。

D：私たちが「戦後をいかに超えるか」と言うときに、それは、ただ「敗戦／戦後」という時間を否定的に捉えるというのではなく、〈68年〉の出来事のように、その中にあった運動的な可能性を現在、もう一度どのように取り戻すかということでもあるだろう。この後の「ラウンドテーブル」では、そういったことも含めて、ぜひ論議していきたいと思う。

「『敗戦／戦後70年』は私・たちの〈問い〉か」のこの後のプログラム

以上のような論議を通じて、「永続敗戦レジーム」に亀裂を入れようとしている沖縄の人たちに続いて、ヤマトの私たちがどのようにその解体へと踏み出すかを考え合うことの「スタート地点」にようやく立ちつつあるように感じています。

「生・労働・運動ネット」では、そうした論議をさらに深めていくことに向けて、以下のような内容・日程で、今後の「ラウンドテーブル・2014」の後半の「『敗戦／戦後70年』は私たちの〈問い〉か」のプログラムを予定しています。ぜひ、一人でも多くの皆さ

んにご参加いただき、ともに活発な論議を生み出していきたいと思いを。

ラウンドテーブル・2014 1月～4月

- 第9回：「敗戦／戦後70年」は私たちの〈問い〉か その2
「赤坂真理『愛と暴力の戦後とその後』を読む」
1月25日(日)PM1:30～4:00 サンフォルテ306号室
- 第10回：「敗戦／戦後70年」は私たちの〈問い〉か その3
「『敗戦／戦後70年』！？ ——小さきものの声／聞き取れぬほどの微かな声／
ついに発せられなかった声の行方を探る」
2月11日(水)PM1:30～4:00 自治労とやま会館303号室
- 第11回：「敗戦／戦後70年」は私たちの〈問い〉か その4
「白井聡『永続敗戦論』が問いかけるもの」
2月22日(日)PM1:30～4:00 サンフォルテ302号室
- 第12回：「敗戦／戦後70年」は私たちの〈問い〉か その5
「小熊英二『戦後史研究会・報告』を読む」
3月22日(日)PM1:30～4:00 サンフォルテ306号室
- 第13回：「敗戦／戦後70年」は私たちの〈問い〉か その6
「武藤一羊『戦後日本と脱植民地化回避の仕組み』が問いかけるもの」
4月26日(日)PM1:30～4:00 サンフォルテ302号室